

## 障害とパフォーミング・アーツ研究会〈第7回〉議事録

日時：平成29年12月1日（金）13：00～16：00

会場：アーツカウンシル東京 大会議室

内容：参加団体の活動紹介④、厚生労働省「障害者文化活動普及支援事業」東京都支援センター「アーツサポ東京」について（社会福祉法人トット基金・佐藤宏美氏）、Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募の紹介、意見交換

参加者（順不同）：ソケリッサ（一般社団法人アオキカク）（アオキ代表理事、横内、山本）、喜多能楽堂（公益財団法人十四世六平太記念財団）（清水館長）、一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティ（鈴木）、おこわ（山口代表）、日本児童・青少年演劇劇団協同組合（児演協）（喜多村）、公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団（山岸）、特定非営利活動法人みんなのダンスフィールド（村中）、特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（廣川理事長）、日本ろう者劇団（社会福祉法人トット基金）（小池）、サインアートプロジェクト・アジア（大橋代表）、特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン（柴崎代表理事）、クリエイティブ・アート実行委員会（伊地知）、DDD Project（田中代表）、特定非営利活動法人シニア演劇ネットワーク（遠藤副理事長）、有限会社オフィスルゥ（北田）

進行役：吉野さつき（愛知大学文学部メディア芸術専攻准教授）

オブザーバー（順不同）：大塚千枝（厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部企画課自立支援振興室 障害者芸術文化活動支援専門官）、細見史子（文化庁文化部 芸術文化課文化活動振興室 事業支援係長）、鈴木京子（ビッグ・アイ共働機構／国際障害者交流センター事業プロデューサー、一般財団法人日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS パフォーミングアーツ・グループ プロデューサー）、森真理子（一般財団法人日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS パフォーミングアーツ・グループ チーフ・ディレクター）、佐藤宏美（アーツサポ東京／社会福祉法人トット基金）

アーツカウンシル東京出席者：杉谷企画助成課長、石綿オリンピック・パラリンピック文化戦略担当課長、角南オリンピック・パラリンピック文化戦略担当係長、佐野プログラム担当係長、今野プログラム担当係長、小野寺企画担当係長

佐野：今回初めての参加となる7団体から、後ほど簡単に活動のご紹介をいただきます。まずは自己紹介をお願いいたします。

山岸：初めて参加します、日本フィルハーモニー交響楽団の山岸と申します。

清水：初めて参加します、喜多能楽堂を運営している十四世六平太記念財団の清水と申します。

鈴木（麻）：初めて参加します、一般社団法人ダイアログ・ジャパン・ソサエティのリーダーチャーをしています、鈴木と申します。

山口：初めて参加します、「こどもと音楽の未来をつくる」という催しをやっている「おこわ」という団体の代表の山口遥子と申します。

喜多村：初めて参加します、日本児童・青少年演劇劇団協同組合の喜多村と申します。理事が公演で東京を離れておりますので、代わりに参加させていただきます。

鈴木（京）：オブザーバーで、ビッグ・アイの鈴木と申します。今年度から一般財団法人日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS のパフォーミングアーツ・グループでもプロデュースをすることになりました。

森：初めてオブザーバーで参加します、同じく日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS のパフォーミングアーツ・グループでチーフ・ディレクターをしています、森です。

アオキ：初めて参加します、一般社団法人アオキカクのアオキ裕キと申します。

横内：ソケリッサメンバーの横内真人と申します。

山本：同じく、ソケリッサの制作をしております、山本と申します。

佐藤：オブザーバーです。社会福祉法人トット基金でアーツサポ東京のコーディネートをしています、佐藤宏美と申します。

大塚：オブザーバーの大塚千枝と申します。去年は団体側で参加しましたが、今は厚生労働省障害保健福祉部の自立支援振興室で、障害者芸術文化活動支援専門官をしています。

細見：オブザーバーで参加します、文化庁の細見と申します。子どもに芸術の鑑賞・体験機会を提供する事業と、障害者芸術を含む共生社会の実現に向けた事業を担当しています。

## 1. 新規参加団体の活動紹介

### (1) 日本フィルハーモニー交響楽団

山岸：日本フィルハーモニー交響楽団の山岸と申します。担当業務の都合で、1時半には失礼してしまいます。先にお詫び申し上げます。芸術創造活動を行っているオーケストラという立場で、皆さんのお立場と少し違いがありますが、日本フィル、その支援スキーム、今回の事業についてご紹介します。

日本フィルには80余名の演奏家と20数名のスタッフがおります。舞台上の演奏家集団という狭義のオーケストラだけでなく、我々スタッフ、支援する方、それからお客様も含めた大きな社会的集団がオーケストラだと捉え、活動しています。

日本フィルがオーケストラ形式で行う演奏活動は年間約150回で、日本のオーケストラとしては極めて数が多いです。リハーサルも含めると大体年間260～270日の稼働日数です。ちなみに、支援体制が裕福なオーケストラほど演奏回数が少なくなります。この他に、オーケストラ公演以外の活動が年間260回あります。例えば、カルテットとかクインテットといった編成で、学校や施設などに出かけていくコンサートです。さらに、演奏の前後にお客様とコミュニケーションする機会、演奏会についてよりよく理解していただくためのプログラム、オーケストラの団員が行う音楽創作ワークショップなどにも取り組んでいます。例えば、これは学校のクラスに出かけていく創作プログラムですが、トロンボーン奏者がファシリテーター・リーダーで、チェロ奏者2人とやっています。これはホールで行うプログラムです。こういった場所でも、音楽を通したコミュニケーションの活動をたくさん行っております。お配りした活動報告12～13ページのエデュケーション、14～15ページのリージョナル・アクティビティをご参照ください。

我々は、オーケストラには芸術的成果が求められるだけでなく、社会的な役割が含まれていると認識しています。日本のオーケストラ全てが、地域社会あるいは教育などへの寄与を意識した活動をしています。私どもの大きな特徴は、このミッションを果たすための活動の広さと、日本のオーケストラで唯一、専任の部署を設けていることです。この分野でリーダーシップをとる責任もあると考えています。

演奏活動の中で障害をお持ちの方などサポートが必要な方のために、いまできていることをご紹介します。実はあまり多くありません。まず年間150回のコンサートでは、障害者手帳をお持ちの方にはチケット料金でサービスしています。例えば、3,500～8,000円の幅で値段を設定しているコンサートでは、障害者手帳をお持ちの方は1,500

0円くらいでお聴きいただけます。同伴者も同じ値段です。それから、東京と横浜の定期演奏会のみですが、楽譜点訳の会という団体のサポートで点字プログラムをご用意しています。一部の主催公演では、パイオニアさんの体感音響システム（ボディソニック）を受け入れています。また、パイオニアさん主催の「身体で聴こう音楽会」に私どものメンバーも出演させていただいています。いろいろ行っていますが、多様な方々をコンサートにお迎えするシステムが整っているとは言えません。多言語対応、チケットを買いやすくする決済システムなど、一般的には遅れています。こちらが出かけていく活動はそのコミュニティに限定したものになりますし、創作ワークショップなども限られた人数です。ワークショップの参加者に1人英語の方がいて通訳をつけると、その方は通訳者とのコミュニケーションになってしまって、ファシリテーターとのコミュニケーションが難しくなります。多様な方々に十分お応えできてはいないと思っています。

次に、今回の助成事業のご紹介です。4月に「耳で聴かない音楽会」ということで、「動物の謝肉祭」という曲をテーマに、聴覚障害の方を主な対象としたコンサートを開催する予定です。これは、落合陽一さんというメディアアーティストがつくっておられる LIVE JACKET を体験したことがきっかけになりました。LIVE JACKET は、ジャケットの中に16チャンネルのスピーカーを内蔵して、皮膚や体で響きを感じることができる、体感音響システムに似たものです。特に障害者向けに開発したものではなく、ロックバンドのプロモーションなどに使われていました。私はこの LIVE JACKET の体に響く体験が、コンサートホールで響きや振動を体で受ける感覚ととても似ていると感銘を受けました。また、これを着てみて初めて音楽が分かったと、聴覚障害の方から大きな反響があったことをツイッターで知りました。発信者に会いに行き、話を聞くと、LIVE JACKET が欲しいと。たった1人のご意見ですが。それで、我々のコンサートで使えないかと考えたのが動機です。障害者支援をしたくて始めたというよりは、このジャケットがあれば耳の聞こえない方々も私と同じ感覚で音楽を楽しんでいただけるかもしれないという、音楽団体の立場からの発想です。皆様からご意見をいただいて、この機会に知見を深めて、各オーケストラに伝えていきたいと思っています。

## (2) ソケリッサ

アオキ：一般社団法人アオキカクのアオキ裕キと申します。ダンサー・振付家として活動していて、生きることに向き合わざるを得ない体を持った方々の踊りが観たいと思っています

ます。路上生活を経験されている方はまさにそこに向き合う生活をしている。そこに興味を持って、2007年から一緒にパフォーマンスの活動をしています。

先日、AFP BBニュースで自分たちの活動をまとめていただいたのでご覧ください。

(映像、以下は映像中の音声)

アオキ：路上で生きている人は、四季を感じて、朝昼晩の移り変わりを感じて、夜になると寒くなって、真っ暗で怖さを感じて、生きることに直面した感覚がぐっと開いている部分があるんじゃないかと。

A：64歳になって自分の人生を振り返ったときに、今までは逃げることの繰り返しだった、この先、逃げるところはあの世かなと考えるようになりました。自分の持っているものは体だけだと思いました。仕事につけなくなって、お金がなくなる。泊まれるところもなく、路上生活が現実のものになりました。目指すもの、打ち込むものが全然なかった。やる事がなかった。ソケリッサは、それを自分に与えてくれていると思います。自分の時間や行動、活動の範囲をある程度占めている。もう飾れないし、背伸びもしないし、素のまま、何やら開き直った感じがあります。

B：6時35分までに起きなきゃ。豆腐が30円で売っているの。1日1食を目途に考えているので、2丁食うと意外とお腹いっぱいになる。何かをやろうという気力もお金もなくなって、3週間ぐらい水だけで生活しております。人生に諦めも入っているし、そのまま野垂れ死んでもいいかなと。アオキ先生が踊りの楽しさを教えている世界を見て、手伝いたいなど。自分はお金のない生活で明日がどうなるかわからないくせに、すごいな、手伝いたいという気持ちが湧いてきて、気づいたらそのまま練習に参加して。自分は踊るのが大好きだったから、すごく楽しくて。

C：ある意味しんどい生活をしていたので、ソケリッサと一緒に活動していく中で、次から次へとどんどん、踊りだけですけど、やりたいことが。

D：すごい臨場感があって、何か伝えようとしていることが少し分かったような気がしました。その瞬間、すごく楽しい、分かりたいと思った。心地良い問いを投げかけられたような感じがしました。

E：路上生活をしている方々を、今まではそこまで踏み込んで見てなかったけれど、ソケリッサの人たちに会って、この人はどんな感じなのかとか。

F：それぞれの人生観が動きに見えてくると思います。全力でやることと、誠実にやることですね。

G：路上生活の人は、石ころのような、人から目を背けられるような存在じゃないですか。道端に落ちている石ころをふと眺めると、石ころはずっと前からずっとそこに転がっていて、自分よりいろいろな景色を実は見ている。その石ころを人は簡単に蹴飛ばすけれど、石ころから見たら、今の世の中は本当に必要じゃないことにみんな価値を感じて過ごしている。日々荒野のような存在じゃないのかなという。

(映像終了)

アオキ：こんな感じで、「日々荒野ツアー」というのを今年6月から来年の9月に向けて行っています。アーツカウンシル東京の助成をいただいて、主に路上で、芸術に触れる機会の少ない方に踊りを提供して、メンバー勧誘も含めてパフォーマンスを行っています。

場所と活動を写真でご紹介します。東池袋中央公園は炊き出し会場で、路上生活のおじさんがたくさん来るところです。3月にここからスタートしました。神田のテラススクエアという大きいところでは200人ぐらい。歌手の寺尾紗穂さんとコラボレーションしました。川崎ではトカイナカヴィレッジという、個人の農地を借りてやりました。文京区の光源寺では、写真家のアダムさんがメンバーの写真を撮って、その展示と一緒にパフォーマンスしました。先ほどの映像に出た隅田公園は、路上生活の方がずらっといられる場所なので、いいなと思っています。木場公園では、アースキャラバンというイベントの中でやらせていただきました。錦糸町の駅前のときは雨が降って大変でしたが、たくさんの方が足をとめて見てくださいました。墨田区役所前にも路上生活の方が周りにいるので、やりたいなと思っています。横浜の東福寺は夜で、雨が降っていました。写真の煙のようなのは、雨が背中から湯気になって出たものです。井の頭公園ではテニスコートさんという音楽グループの方と一緒に。このときも雨でした。緑の子どもは息子で、勝手に乱入して一緒に踊っています。

場所によっていろいろなことが起こって、いろいろな人が出会って何かが生まれる。自分はその景色をととても楽しんでやらせてもらっています。いろいろな場所で自分たちが受容されている。2020年ということに意識を向けると、競う体に価値を見出すのではなく、いろいろな体に価値を見出して、その体をいかに生かすか。自分たちのアプローチが真の意味で「生きる体」の再建の一環になると自分は思っています。

来年は最後に、東池袋中央公園で炊き出しの夏祭の時に、路上のおじさんたちに見せられるといいと思います。

現在いるメンバーです。みんな、とてもいい顔をしています。会ったときは暗い顔をし

ていましたが、踊るとこういうきらきらと輝くような顔になって、いいなと思います。

### (3) おこわ

山口：おこわというのは略称で、「音楽・こどもの城・わたしたち」の1文字ずつを取っています。お配りしたパンフレットは11月に行われた「こどもと音楽の未来をつくる」という催しの第3回目のもので、おこわは、この催しのためだけに結成されたグループで、学生、音楽家、ダンサー、保母さん、大学の教員などが有志で集まって始めました。

始めた経緯をお伝えします。私は東京藝大に所属して芸術哲学を研究している研究者ですが、子どもを産んでから、子ども向けの芸術やパフォーマンス・アーツを見るようになり、学会で海外へ行った時なども子ども向けの演目を探して見るようにしていました。本当に奥深い世界があることに気づいて、日本の児童館文化もばかにできないと思いました。特に心から衝撃を受けたのが、東京・青山のこどもの城でした。こどもの城には音楽室、美術室、体操室や、病院もあって、障害児もたくさん訪れて、普通の子どもと分け隔てなく音楽プログラムを楽しんでいました。子ども向けプログラムには、注意を引きつける熟練のテクニックが必要です。こどもの城は30年前に開館し、2015年に厚労省の決定で閉館しましたが、開館のときから音楽室を設けて、専任の職員が毎日朝から晩まで、普通のミュージシャンはやらないような密度でライブを続けてきました。子どもたちとの対話でつくってきて、ようやく閉館の5年前ぐらいにプログラムが完成したと言っていました。ようやく築き上げてきた遺産が失われると衝撃を受けて、こどもの城がなくなった後どこかでそれを引き継げないかと考えました。私自身が何とかするつもりでした。音楽主任だった遠藤由加里さんは閉館で解雇され、音楽的な才能を生かす場が失われて、保母さんのような活動をされています。彼女と、私が師事していた東京大学の芸術哲学の小田部先生と3人でこの催しを立ち上げました。

プログラムにタイムテーブルが載っています。朝10時半から夕方までひっきりなしにプログラムが繰り広げられます。こどもの城の日常を再現するという目論見でやっています。国がやっていた施設を個人で再現するのはかなり難しいので、年間数回しかできませんけれども、何とか3回までこぎつけて、3月に第4回を行う予定です。今日お見えのソケリッサさんが、東大の研究室の先輩に当たる寺尾紗穂さんと一緒に参加してくださいませ。こどもの城で行われていたプログラムと、今までにない子ども向けの工夫を凝らした新しい音楽プログラム、さらに音楽的に優れた人たちを見つけてきて、一緒に舞台に立つ

てもらふことを予定しています。

こどもの城の人たちには技術があるので、子どもに対する音楽の導き方をほかの出演者が学ぶことができます。児童館系の音楽家の人たちも新しい音楽と一緒にやることで、刺激的な相互作用が生まれていると思います。(映像) これは、第2回の模様をまとめたものです。東大の運動室を3室借りて、さらにお弁当を食べたりオムツをかえたりするための施設を、一棟丸ごと借り切っています。来場者は子ども250、大人250、あわせて400~500人ぐらいが毎回来ています。学校の教室で舞台装置などは何もないので、前日にみんなで集まってつくります。舞台デザインは伊勢丹のディスプレイなどもやっている安藤さんというプロのデザイナーが、この催しに賛同してほとんどボランティアでデザインしてくれて、私たちが装飾を手作りしています。いま写っているおじさんは、ウィーンの楽友協会ホールで演奏するようなピアニストですが、こどもの城では楽器博士というのぼりを持ってぶらぶらしていました。こどもの城はすぐれた音楽家が自然と集まる場所になっていました。子どもは音楽をずっと集中して聞くのは難しいので、後ろの方で美術家、アーティストなどこの活動に賛同してくれる人たちがお絵描きなどのワークショップをやってくれます。

今後の課題について触れておきます。こどもの城があった青山に近い都心で発信したいと、東大の駒場キャンパスを会場にしましたが、渋谷、駒場、松濤にはお金持ちの人が多くて、文化的に興味のある恵まれた家族がほとんどといった印象です。できるだけ幅広い人に来てもらいたいので、渋谷や新宿の繁華街の24時間保育園などにチラシを持っていきましたが、なかなか届けきれません。無料にするなど、これから考えていきたいと思っています。

#### (4) ダイアログ・ジャパン・ソサエティ

鈴木(麻): ダイアログ・ジャパン・ソサエティのリサーチャーの鈴木と申します。これがホームページですが、「Challenged change the world」として、団体の思いを伝えています。障害者や高齢者と出会ってほしい。不自由な人とか弱者だからではなくて、彼らだからこそ持っている能力や豊かな感性や知恵があるので、対話をすることでお互いの能力を生かし合って、社会を豊かに変えていきたいということです。

具体的には3つのプログラムを運営しています。一番長くやっているのは「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」です。ドイツで発祥したプログラムのライセンスを取って、日本



で運営しています。8人ぐらいのグループで真っ暗闇の中を視覚障害者のアテンドに案内をしてもらって、目を使わない世界を体験します。いわゆる障害の疑似体験ではありません。目が見える世界は豊かですが、目を使わないとなった瞬間に、音など視覚以外の五感が研ぎ澄まされて、人とのコミュニケーションのあり方が変わります。視覚障害のアテンドは暗闇の専門家ということで、ふだん目を使わない彼らだからこそ頼りになるという関係性の変化も楽しんでいただけるイベントです。1999年に短期イベントとして始めて、いまは常設開催しています。

今年度アーツカウンシル東京さんの助成をいただいて、「ダイアログ・イン・サイレンス」と、「ダイアログ・ウィズ・タイム」というプログラムを加えました。ダイアログ・イン・サイレンスは聴覚障害の方がアテンドとなって、音のない世界でコミュニケーションを楽しむプログラムです。大橋さんと廣川さんのお二人が、この夏アテンドとして大活躍してくださいました。ニュースの動画を少し流します。(映像)音がない体験なので、音はあまり流れていません。今年初めて8月に20日間、新宿で開催しました。ふだん耳を使わない聴覚障害のアテンド1名に対して、12名のグループをつくり、音が聞こえなくなるヘッドセットをして、会場の中では聞こえないし喋らないというルールで各部屋を進みます。アーツカウンシルさんの助成の他にも、ダイアログ・イン・ザ・ダークでお世話になった企業さんにいろいろとご支援いただきました。全部で6つの部屋を巡る90分程度のプログラムです。初めは手の動きで、次に表情、サインで、言葉を使わずにコミュニケーションをとって、それぞれ何を伝えられるかを体験します。最後にみんなでゲームをやって、アテンドスタッフを交えて対話をします。

今回初めての開催でしたが、約3,300人の方にご参加いただきました。20日間満員で驚きました。多くの方が満足したとご回答くださいました。体験を通じた気づきということでは、表情の大切さがわかった、ボディランゲージで言語の壁を越えた、他にも観察力や集中力などいろいろな観点を持ち帰っていただきました。感想としては、声がなくともこんなに豊かに人と関われるのか、人の心の声を聞こうと思う、また聴覚障害の方は、これまで手話を使ってきたけれども、観察力があれば他の人が何を伝えようとしているのか読み取れるなど、いろいろ感想をいただきました。

アテンドスタッフは、ダイアログ・イン・サイレンスを既にやっているドイツとイスラエルの団体からトレーナーを招いて研修をした上で、16名にデビューしていただきました。タイトなスケジュールで大変だったと思いますが、責任感や自信が出てきた、より

自由に創造的になれたなどの感想をいただいています。大橋さんと廣川さんにはアテンドリーダーを務めていただきました。

もう一つ、ダイアログ・ウィズ・タイムというプログラムは、70歳以上のアテンドさんと年を重ねることの豊かさを体験していただくものです。2020年に向けて、この3つが一度に体験できるダイアログ・ミュージアムというようなものを目指しています。アテンドさん同士の交流も広まるでしょう。障害のある方たち、高齢の方たちだからこそ提供できるエンターテインメントとして広げていきたいと思います。

#### (5) 喜多能楽堂

清水：喜多能楽堂館長の清水と申します。喜多能楽堂は、観世流、宝生流、金剛流、金春流、喜多流と5つある能楽シテ方の流儀の1つで、450年の歴史のある喜多流の、本丸の能楽堂です。目黒駅から歩いて5～6分のところにあります。この能楽堂を運営するのが公益財団法人十四世六平太記念財団です。約5年前に公益認定をいただいたことをきっかけに、外に向けた劇場として活動していこうと方針を変えました。活動の一端を冊子の30～33ページで紹介していますのでご覧ください。

いろいろな普及活動の中で、障害を持つ方のために何ができるのかとずっと考えていた時、たまたまいつもと違う道を歩いていてトット基金さんを見つけました。あの手話狂言をやっていたらトット基金ってここにあったんだと。看板の情報を見ると、手話通訳の教室もやっている。それで、能に手話同時通訳をつけられないかと思い相談しました。能の公演に手話通訳をつける例は他にもありますが、公演前の解説に手話をつける、公演は書いたものを見てもらうというのが一般的です。今回我々が考えたのは、最初から最後まで手話同時通訳をつけて見ていただくという、他に誰もやっていない初めての試みです。

まず台本づくりを始めました。難しい漢字で書いてある能の謡本のままでは手話通訳できませんので、現代語訳にして、それを場面に区切って通訳できる形を整えました。次に、通訳の立つ場所を考えました。能舞台は、客席がぐるりと舞台を囲む形状ですので、字幕をつけづらいですし、通訳者の立つ位置もなかなか難しい。いろいろ考えて、上手側に1人、下手の橋懸りという出入りの通路の前に1人、立ってもらうことにしました。もう一つ問題があって、囃子という音楽だけでつなぐ場面をどうするか。今、激しく音楽が鳴っていますと手話で通訳しても面白くない。いよいよ鬼が出てきて山伏たちに襲いかかるといふ緊張感が、激しいリズムでかき鳴らされるのをどう伝えるか。困っていたところ、パ

イオニアさんの体感音響システムをたまたま見つけてご連絡すると、やってみましょうということになりました。手話通訳と体感音響の組み合わせで、ほぼ最終形ができました。昨年の初公演は、おかげさまで非常に大きな反響をいただきました。

トット基金さんのコンセプトは、聞こえない人も聞こえる人も一緒に同じ舞台を楽しもうということなので、お客様には健常者もいらっしゃる。舞台の前2カ所に手話通訳がずっと立っているのが邪魔だという声が出たらどうしようと懸念しましたが、終わってみると反応は逆で、非常に面白かった、いつもの能よりよく分かったという声をいただきました。健常者にとって、手話通訳を見続ける経験は初めてだったのかもしれませんが。会場で台本をお配りするので、大体皆さんこれを見ながら舞台を追いかけるのですが、健常者の方は舞台を見ながら手話を見て、手話ってこういうふうに流れるんだということを知った。健常者の手話への理解を広げることができたとも思います。

出演者の声はまったく意外でした。謡の人たちは舞台の上から手話通訳の方の背中をずっと見ていますが、能と手話がこんなに合うと思わなかった、能のリズムと手話がシンクロするというのです。考えてみると、能は舞と謡で構成しますが、舞は身体を使って言葉を表現するものなので、その点は手話と同じです。やってみて分かったことがいろいろあります。

再演の声に応え、第2回の公演を終えたところです。チラシを見ていただくと、舞台の客席形状と手話通訳の立ち位置、パイオニアの体感音響システムのついた座席がわかります。今年はさらに、難聴者にクリアな音を聞いていただく補助システムとして、ヒアリンググループという磁気ループを用意しました。

好評をいただいている公演でもあり、これからも続けていきたいと思います。1回目と2回目は「黒塚」をやりましたが、来年は新作で「船弁慶」という話になっています。手話通訳用の台本があれば、喜多能楽堂のみならず、ほかの会場にも持って行くことができます。手話通訳はタブレット端末など特別なデバイスを必要としない点も大きな特色だと思います。パイオニアさんとのセットが望ましいです。そうしたことも含めて活動を広げていきたいと思っています。

#### (6) 日本児童・青少年演劇劇団協同組合 (児演協)

喜多村：今日は担当理事の都合がつかず、事務局の私が説明させていただきます。児演協、正式名称は日本児童・青少年演劇劇団協同組合は、昭和50年3月に日本児童演劇劇団協

議会という名前で設立しました。児童・青少年演劇の職業的基盤の確立、児童・青少年演劇人の健康と生活の擁護、児童・青少年演劇に関わる全国的な課題の実現の3つを目標としています。平成13年8月に協同組合の法人を取得し、現在は舞台劇、人形劇、影絵、パフォーマンスなど多岐にわたるジャンルの63劇団で構成されています。

主に5本の事業があります。まずは共同公演で、幼稚園や保育園の園児の鑑賞体験の推進、小中高の演劇鑑賞教室、こども劇場との連携による公演などです。次に演劇祭ということで、主催・共催事業として幾つかのフェスティバルをさせていただいております。主催事業である夏休みの児童・青少年演劇フェスティバルは今年45年目を迎えます。42ステージ、延べ5,000人以上の方にお越しいただきました。共催事業としては、東京都のふれあいこどもまつり、佐久市とのキッズサーキット in SAKUなどを実施しています。3つ目に人材育成、表現活動教育です。文化庁の委託事業で、演劇人育成の連続講座を実施しています。出版事業としては、機関誌『げき』の発刊、『証言・児童演劇』という戦前から現在までの児童演劇関係者による証言集の出版があります。国際交流事業では、「空の村号」、「ちゃんぷるー」、新作「Baby Space」などを制作、上演しています。ポーランドの演出家と「KUUKI」という作品も上演させていただきました。

今回は乳幼児向けの新作「Baby Space」という演目にアーツカウンシル東京の助成金をいただきました。2015年の画像をごらんください。(映像)振付家のダリア・アチン・セランダー氏と一緒に日本版を創作しました。3～18カ月の乳幼児のための舞台芸術です。世界の児童・青少年演劇界で今トレンドのジャンルとされています。インスタレーションでもあるスペースそのものを制作して、その空間で親子がのびのび過ごし、パフォーマンスを鑑賞し、終演後はその中で遊ぶことができます。周囲からはっきりと隔てられてリラックスできる環境を確保し、マルチメディアとアニメーション、ダンスと音楽と詩を組み合わせ、五感の全てを刺激します。空間は3つの感覚の領域から成り立っています。まず、触覚のエリア。このインスタレーションの内部は手ざわりが滑らかでやわらかく、弾力性のある素材でつくられています。聴覚のエリアでは音楽的に、抽象的・感覚的経験のための空間を生み出しています。詩的な言葉が反響するかのように聞こえる神秘的な空間です。そして、視覚エリア。真っ白な空間でダンサーのパフォーマンスが行われている間、LED照明の暖かな色の変化を体験します。

言葉を獲得する前の乳幼児の発達のために、総合芸術である演劇でしかなし得ない重要な役割があると考えています。赤ちゃんにお芝居を見せて分かるのかとよく聞かれますが、

答えは「イエス」です。脳科学的、神経発達学的にも証明されていて、知覚・知能の発達にはどれだけ芸術的活動をさせるかが鍵と言われます。神経細胞は胎内にいる時につくられ、視覚、聴覚、言語エリアを形成するシナプス、より高い認知機能の前頭葉皮質などは1歳までに成長のピークを迎えると言われます。その大切な時期に、全ての感覚に訴えかける演劇を体験させることが必要と考えています。

障害をお持ちのお子さんと同じ空間で共有できるような、インクルーシブな作品づくりを進めていきたいと考えています。来年1月に渋谷のかぞくのアトリエでBaby Spaceを再演し、地方5カ所を回る予定です。通常の公演のほかにリラクスパフォーマンスと銘打った回を設け、発達障害の子どもたちにも体験してもらえるようにする予定です。

## 2. 「アーツサポ東京」(社会福祉法人トット基金)について

吉野：厚生労働省の障害者文化活動普及支援事業で、東京都の支援センターとして「アーツサポ東京」ができたので、事業のご紹介をしていただきます。

佐藤：トット基金・アーツサポ東京の佐藤と申します。障害のある方の芸術文化活動を支援し盛り立てていくための厚生労働省によるモデル事業は、4年前から全国で10程の社会福祉法人等が行ってきました。美術分野の活動が主でしたが、障害者芸術文化活動普及支援事業という名称で今年からパフォーミング・アーツにも範囲を広げて、各都道府県に一拠点を目標に増やしていくことになりました。この事業の東京都の美術と舞台芸術両方の拠点ということで、社会福祉法人トット基金が運営を担わせていただいています。

トット基金は37年前から社会福祉法人として活動していて、日本ろう者劇団という劇団を運営しています。その実績から今回お任せいただいたのだと思います。障害の種類も芸術ジャンルも全てにわたる支援センターということで、「アーツサポ東京」という名前でこの7月に始動しました。

リーフレットに活動内容が書かれています。まず、相談の受付です。これから表現活動を始めてみたいが、どういうところでどんなことができるかといったご本人や家族からの相談、あるいは、鑑賞に行きたいが、どこで何を見られるのかといった相談を受け付けて回答していく任務です。演劇のことであれば、日本ろう者劇団の俳優が直接お答えできることもありますが、その他の分野のことはそれぞれのご専門のところに問い合わせるといった段取りになります。鑑賞の方ではシアター・アクセシビリティ・ネットワークさんがノウハウもネットワークもお持ちなので、助けていただいています。

2番目に、調査・発掘です。まだあまり活動が広く知られていない団体やアーティストの方々を紹介していくという仕事です。

3番目の研修会の項目では、主に支援の人材を育てていくことが期待されていて、幾つか研修会を企画・実施しています。たとえば盲ろうの方が鑑賞できる環境を考える研究会を、廣川さんが担当しています。大変チャレンジングな課題だと思います。

次にネットワークづくりやワークショップ等の催し物。これも日本ろう者劇団の者がワークショップを行っていきますが、それ以外のジャンルについてはそれぞれの専門でいらっしゃる皆様方のご支援もお借りしたいと思っています。

最後に、情報の発信です。ご覧いただいているウェブサイトを11月の初めに立ち上げました。東京都の特徴として、既にいろいろな団体が活動を積み重ねていらっしゃいますので、そうした団体やご経験などをご紹介していくことも支援センターとしての任務の一つかと考えています。新しく活動を始めたい人の参考にしていただく他に、関係組織にも情報として利用いただけたらと思います。これまでに、アンハードノート・ピアノパラさん、サインアートプロジェクト、アジアンさん、クリエイティブ・アート実行委員会さんなどにインタビューさせていただき、記事でご紹介してきました。皆様のご活動もぜひご紹介させていただきたいと思っています。

皆様のように既にしっかりした活動をされている方たちを支援するというよりも、むしろ皆様にはご協力をお願いしたいと思っております。これから表現活動を始めたい人が、それぞれの思いに合ったグループに参加できるように、あるいは鑑賞したい方に十分な情報が行き渡るように進めていきたいと思っておりますので、ワークショップ、催し物、相談への対応など、ご支援を仰がせてください。どうぞよろしく願いいたします。

吉野：確かに、ここにいらっしゃる皆さんはそれぞれの領域のノウハウ、それぞれに向き合ってきたコミュニティとのつながり、知識と経験を既にお持ちの方たちが多いと思います。ご紹介いただいたような中間支援的な活動を通して、より広い人たちにリーチしていくことはこれから大事になると思います。

### 3. Tokyo Tokyo FESTIVAL 企画公募について

#### (1) 概要説明（アーツカウンシル東京 石綿）

先週、知事の会見で情報が公開になりました企画公募について、ご説明します。まず動画をご覧ください。（映像）Tokyo Tokyo FESTIVALはオリンピック開催3カ月前の2020年

4月からパラリンピック閉会式の9月までに行うオリンピック文化プログラムのフェスティバルで、組織委員会ではNippon フェスティバルと呼んでいます。東京都はTokyo Tokyo FESTIVAL と冠をつけています。企画公募では2019年の秋にスタートするものも若干含まれますが、この時期に実施する企画アイデアを募ります。

対象分野はチラシにあるように、音楽、演劇、舞踊、美術、写真、文学、メディア芸術、更にゲーム、伝統芸能、生活文化、ファッション、建築、特定のジャンルにとらわれない芸術活動全般、あらゆる表現活動を対象としています。期待する企画内容は3つあります。まず「インパクトある芸術創造」、オリンピックの機会に東京を国際都市としてアピールしていくことが大きな目的ですので、21世紀の芸術文化を牽引する挑戦的な企画、芸術性・話題性があり国内外への発信力がある企画です。2つ目に世代、国籍、障害などを超えて「あらゆる人々が参加できる」こと。参加の仕方やプログラムに工夫があり、参加者の記憶に残る体験を提供できる企画。3つ目に「アートの可能性を拓ける」もの。社会支援助成のように社会課題に向き合っただけでアートの新しい可能性を拓けるチャレンジ、または社会に対するアートの視点を活かしたユニークな課題提起や発見がある企画。今回はこうした企画を募集します。

助成事業でなく、東京都とアーツカウンシル東京が主催者となり、事業費を100%委託して企画の実施をお願いすることになります。もちろん、自主財源や企業からの協賛金がプラスされても問題ありませんが、助成ではなく委託という点をご確認いただきたいと思えます。

1件ごとの事業規模は数百万から2億円までです。2億円の案件はフェスティバル形式など大規模な事業になるかと思いますが、大中小のさまざまなレンジの事業企画を募るといことです。2019年秋から2020年9月までに行われる公演や展示の本番は、東京都内でやっていただくことが条件になります。企画アイデアの公募ですので、第一次審査はアイデアレベルとなります。応募概要に書いてあるように、おおよその事業予算、プログラム内容、実施場所の提案といったラフなものを2月末日までに申請していただきます。個人の方でも団体の方でも、実行委員会でも結構です。制作体制が整ってなくても申請できます。応募概要の7ページにフローがあります。5月頃に第一次選考とあります。応募書類を審査会等々で選考させていただき、選ばれた企画についてどういった制作体制が必要なのか、どういった会場でやるのかなど、私共も制作面のサポートをさせていただきますながら、実施計画と精度の高い事業収支予算を作っていただきます。第二次選考として

6～7月頃のプレゼンテーションで最終的に決定し、夏に契約した後、2019年、2020年に向けて制作していただくという段取りです。

これから審査会の体制などをつくっていきます。分野も事業規模も多岐にわたり、いろいろなアイデアがあると思いますので、どんなものが採択されるか具体的には言いにくいですが、定期公演のような通常の活動の延長ではなく、オリンピックという機会を捉えた新しいチャレンジをご一緒にしていきたいと考えています。活動の基盤となり、2020年以降も継続していかれるプロジェクトをぜひご提案いただければと考えています。

## (2) 質疑応答

伊地知：実施が31年秋から32年9月とありますが、毎年応募ができるのですか。

石綿：今回の1回だけです。全く可能性がないとは言えませんが。

小池：1団体何件までという決まりはありますか。

石綿：申請件数の制限はありませんが、1つの団体さんのものを複数採択するということはないと思います。恐らく全体で20～30件くらい採択することになります。

大橋：団体で、自由に応募できるということですか。

石綿：自由です。団体でも個人でもいいです。

柴崎：委託金が入るのは事業の前か、後になるのか。あと規模感が気になります。

角南：基本的には精算払いを前提としていますが、現在、調整しています。採択時期までには固めておきたいと思います。

柴崎：法人の構成員である全国の方たちが東京で発表したいという気持ちを持っています。所在地が東京以外、ないしは他の県や市の補助、助成、委託などを受けている団体が、東京で発表することは可能なのか。他の道府県、自治体等のお金との兼ね合いについてルールや制限があれば教えてください。

石綿：特にないです。収入がどこからあるかは問題になりません。申請者の居住地についての制限もありません。海外からも応募可能です。

小池：2つの団体が一緒に新しい企画を行う場合は、共催という形で申請したほうがいいのか、その辺も要項に書いてあるのですか。

石綿：事業の主催自体は東京都と財団で、実施団体に対して委託することになります。企画などの形でクレジットが入ることになると思います。こちらからの委託費の他に企業や組織の資金があって、2カ所からお金が入っている場合は、共催という形でやっていくこ



とになると思います。2つの団体が企画する場合は実行委員会などをつくっていただいて、そこに対して我々が委託することになります。全く問題ないです。

この事業はこれまで財団がやっていないスキームですので、共催や、他の自治体さんとの連携など、課題が出てくればその都度、現場の方たちのやりやすい体制を検討し調整していきたいと思います。

小池：20～30件とおっしゃいましたが、これは障害者の芸術文化だけでなく全体でということですね。

石綿：全体です。Tokyo Tokyo FESTIVAL にはオリンピック&パラリンピック期間に東京の文化の魅力を世界に発信していくという大きな目的がありますので、それなりのインパクトがあるものが望ましいと思います。東京または社会に対してどんな意味を持つか、何を解決するか、どのような価値観を牽引できるかというような視点も重要です。

伊地知：助成の総額は幾らぐらいですか。31年から32年に向けて、シリーズとして展開してもいいのですか。

石綿：2020年の本番の期間に山を持っていくことが必要になります。継続していくというよりは、そこに向かって盛り上げていくというスキームが必要かと思います。総額に関しては、まだ予算要求の段階ですが、全体でおおよそ15億前後です。

吉野：画期的ですね。新しいことを考える方たちの意見も聞きながら、柔軟に新しい形の事業委託を考えていくというやり方は、今まであまりなかったことです。

佐野：私も今初めて聞く情報もあるのですが、事業委託費の総額が15億円で、採択される企画が20～30という数字から、1件当たりの予算の規模感がわかりますね。数百万から最大2億ということなので、比較的小規模のものが採択になる可能性もあるとは思いますが。アーツカウンシル東京が通常助成対象としているジャンルだけでなく、芸能、生活文化などを含む幅広いジャンルを募集するので、申請の母数も間違いなく増えるだろうと想定されます。

### (3) 今後に向けて

佐野：この機会にこれまで温めてきた企画を実現するという方向性で検討されることも1つですし、例えばフェスティバル形式など、皆さんでまとまって挑戦するという選択肢もあると思います。

吉野：研究会のメンバーの得意分野を掛け合わせて、もっと新しい可能性へ挑戦すること

も検討していただきたいと思います。残りの時間を、団体同士の情報交換や話し合いに使いたいと思います。ビッグ・アイの鈴木京子さんは、鑑賞支援とバリアフリーが整っている劇場でプロデュースしてきた方です。鈴木さんと森さんの関わるプログラムが今、現在進行形で動いていますので、そうした情報も伺えると思います。廣川さんたちの鑑賞支援での活動も、皆さんの活動をより広げる参考になるでしょう。佐藤さんと大塚さんもいらっしゃるので、中間支援や厚労省の支援事業についてお話を聞くこともできます。小さな島をいくつか作って、質問や話し合いをしてください。

(了)